

人類館とは

1903年、大阪で開催された第5回内国勸業博覧会会場近くの見世物小屋で、「学術人類館」と称し、様々な地域の人と一緒に琉球人も展示されるという「人類館事件」が起きた。

『人類館』はこの事件をモチーフに、皇民化教育、沖縄戦、米軍統治とベトナム戦争、本土「復帰」も織り込み、沖縄が辿った歴史を鋭い風刺で描き出す。1976年に初演され、78年には「演劇界の芥川賞」と呼ばれる岸田戯曲賞を受賞した。

知念正真 (作)

ちねんせいしん
1941—2013

劇作家。沖縄市生まれ。コザ高校卒業後、東京の二松学舎大学に入学するも中退。その後、劇団青年芸術劇場に研究生として入団、1963年に退団し、帰郷。演劇集団「創造」に加わり、俳優・演出家として活躍。72年には劇作家としても活動を開始。76年に『人類館』を発表し、「創造」で上演。1903年の大阪・第5回内国勸業博覧会会場近くで「人間の展示」を行った「学術人類館」に発する「人類館事件」を出発点に、沖縄口と沖縄大和口を織り交ぜ、場面展開にも実験性を持たせた本作は、78年に沖縄の作家として初の岸田戯曲賞を受賞。その後も沖縄の地から人間が抱える様々なテーマとメッセージを込めた作品を残した。



『人類館』について、なんだかんだと長い時間を費やして話し合ってみても、未だにすっきりとした読み方が出来ずにいて、どうしても答えがはしくて戯曲の中を闇雲に進んでいくけど、やっぱり出口が見当たらないわけで。

今回のクリエーションは「満たされないこと」や「曖昧さ」がポイントだったように思う。全てに決定をつけたい欲求に脅かされながら、支配と解放、内側と外側、強さと脆さ、そんな二項対立的なものが隣接し両立していることを受け入れていくことが何よりも重要だった。

ところで、『人類館』のオチを超簡単に説明すると、差別されてた側が差別する側になって（なっちゃって）、結局差別は終わらず歴史は繰り返されていくってオチなんだけど。（いろんな解釈があるとは思いますが、諸々端折って超簡単にね）

クリエーションの始めの頃、知念あかねさんがこのオチを希望にしたいって言い出したの。（まじでどうゆうこと？って思った）

『人類館』に対して全く希望的要素を感じてなかったから、とりあえず空返事をお返ししたことを覚えてる。だって、タイトルに「喜劇」ってついてるのだからアンチテーゼ的なことだと思ってたし。（あ、でもタイトルに「喜劇」ってついてる理由も面白いからどこかで話したい）

現在も『人類館』を希望として立ち上げるための道筋は明確ではない、けど、でも、もしかしたら、カタルシスからの脱却は可能なのかもしれない。

敵も戦争の被害者であること、彼も私も同じ人間だということ。満たすだけではない、どこか不足する（していく）ような関係性が私たちとこの作品の間に必要なんじゃないかな。

今回の2025年新演出版は、これまでの長く続いた『人類館』の歴史の中で、起こりうるエラーなんだと思う。繰り返される歴史をちょっとだけズラしてみるね。

演出 新垣七奈

『人類館』の場面構成

時代も場所も特定できない粗末な小屋。「大和人」が沖繩についての知識で飾り立てたような雰囲気がある。「リウキウ、チョーセンお断り」と書いた札が置かれており、そこに一組の男女が「陳列」されている。サーカスの調教師風な男が登場し、「人類館」を紹介しはじめる。

男は鞭を手に「琉球館」の男女の「身体的特徴」について述べ、「琉球の土民」の住居と食事について語る。話し終えると、調教師は次のパビリオンへと去る。

陳列された男が語りはじめる。騙されて連れてこられた、人類館は刑務所よりひどく、囚人以下の奴隷だと言う。男と女の過去が少しずつ見えてくる。突然、「謝敷節」が流れ、男女は「奥山の牡丹」の首里安仁屋勢頭部落の場を演じる。

いつのまにか調教師は企業で出世できず、酒を飲んで愚痴をこぼすサラリーマンになる。出世できなかった理由は「リュウキウ」だからだった。陳列されているはずの男女が、逆に調教師風の男を慰める。しかし、芋を勧めても男が食わないことから、調教師はふたたび激怒する。

場面は取調室と化す。調教師は尋問する特高警察のようになり、男を厳しく詰問し自白を強要する。初めは話しながらなかった男が重い口を開くと、沖繩戦での「集団自決」の記憶を吐き出しはじめる。女はベトナム戦争帰りのアメリカ兵を相手にする売買春について語る。

ジェット機の音が轟くと、どこからか太鼓の音が聞こえ、男女はそれに操られるように「京太郎」を踊る。場面はベトナム戦争期の沖繩の精神病院になっている。調教師は精神科医として「沖繩館」を紹介する。そこに戦争帰りのアメリカ兵が爆竹を投げ込む。

再び激しい爆発音がすると、今度は沖繩戦の末期になる。調教師は日本軍人となり、女はひめゆり部隊から女子挺身隊、男は鉄血勤皇隊から

騒ぎを耳にして、調教師風な男がふたたび登場し、二人を叱責し、黙らせる。

男女が小屋へ戻ると、場面は突如、「一億国民」ぞって国難に対処しなければならぬ戦時中へと変化する。調教師風な男は、「日本的秩序意識」の根本は日本語にあるとして、方言の使用を禁止し、男女に対して日本語の発音を教育する。

調教師がいなくなると、二人は喧嘩を始める。男は口ほどにもなく、女よりも弱い。

そこに調教師が戻り、「教育勅語を朗唱しはじめるが、他の音に乱されてしまう。

小学校の鐘の音が響くと、突然「給食時間」になり、調教師が男女に手を与える。女は食べるが、男は食べない。食事が落ち着くと、調教師は女に「日本の防波堤として」「日本人の血が汚されないよう、外国人への性的犠牲になれと説く。男がくしゃみをすると、調教師はくしゃみまで日本風でなければならないと激怒する。

郷土防衛隊へと移り変わる。軍人は、日本語の発音によって日本人か敵のスパイかを試し、男を殺す。女の連れた赤ん坊もつるさいと言って殺す。

場面はそのまま変化し、三人はやっぱりるを逃げる地域の人びとになる。調教師はカマー、男はカミー、女はウシーと呼ばれる。カマーは妻ウサがすでに亡くなったことを聞き知る。三人は、カマーが一つだけ持った手榴弾で一緒に死のうとする。

調教師はまた日本軍人に戻る。終戦を告げるアメリカ人の声が外から聞こえる。軍人である調教師は、最後の一人になっても降伏しないと言う。男女もまた、一緒に死なせてほしいと訴える。

一転、調教師は戦後の教育者になり、無駄死にせずに新生沖繩県を目指そうと呼びかける。場面は沖繩「復帰」運動の時期になり、男と女はデモに飛び出していく。一人残された調教師が落ちている手を拾い上げる。ふんふん…。

しかし『人類館』の幕は簡単には下りない。なぜなら、「歴史は繰り返す」ものだから…。

『人類館』をよく知るためのキーワードズ

■リウキウ・チョーセンお断り
沖繩の人びとの本土への出稼ぎが本格化した1920年代以降、本土の企業・工場や不動産屋に掲げられた札や張り紙。求人や賃貸物件に「職工募集」間貸し、ただし琉球人、朝鮮人お断り」と書かれていた。1960年代まで目にする事があったという。

■学術人類館／人類館事件
1903年の大阪・第5回内国勸業博覧会の会場近くで「学術人類館」と称して人間が「展示」された。アイヌ人、台湾人、インド人、ザンジバル人ら26名の中に沖繩の女性2名が含まれていた。琉球新報の太田朝敷は台湾人やアイヌ人と琉球人を同一視するなというまた別の差別の言説でこれを糾弾し、のちに「琉球人」2名の展示は中止された。

■基本的人権
人が誰しも生まれながらにして持ち、生存のために欠かすことのできない権利と自由で、憲法によって保障され、国家に侵されないものをいう。しかしながら、基本的人権は社会状況に応じて変遷するため、具体的内容と保障の制度は国や時代により異なっている。

■アマミキヨ種族
アマミキヨは琉球の神話において

■志情の朽ちゆみ
いつ迄も肝に思ひこめて：

沖繩三天歌劇の一つ伊良波尹吉『奥山の牡丹』の引用。チラーは恋人の子を産んだにもかかわらず、被差別身分に生まれたゆえに、一緒にいることができない。後年、成人した息子が母を探しに奥山を訪れるが、子の立身出世の妨げになりたくない、母は身を投げる。

■事大主義
小国が礼をもって大国に事えること。転じて、勢力の強いものにつき従う行動様式。『人類館』では、調教師風な男が陳列された男女に向かって、「こんな調子だからお前たちは事大主義だと言われるんだ」と責め立てる。

■「畏れ多くも」
沖繩戦直前まで、学校行事や全校集会では教育勅語が必ず読まれ、生徒たちは読まれている間、頭を下げて聞いていた。また教師が言葉の初めに「畏れ多くも」と付けるときは、天皇のことを話すという合図であるため、生徒はすぐに頭を下げ、かしこまって聞かなければならなかった。

■高尚な文化人類学
1903年の大阪・第5回内国勸業博覧会の会場近くで開催された「人間の展示」は、当初「人類館」の

て国土を創ったとされる女神。『おもしろさうし』には「あまみきよ」と「しねりきよ」の二神が日神に命じられて島々と人間を造った神話が歌われている。琉球の最初の史書『中山世鑑』（1650年編述）では創成神は「阿摩美久」（アマミキヨ）一人。

■のら如来、粉米の生嚼み
二代目市川團十郎によって初演された歌舞伎十八番の一つ『外郎売り』の口上の一部。日本語の発音や滑舌のトレーニングに現在でも使われている。

■イモ・はだし論
1968年に初めて沖繩住民が琉球政府行政主席を公選した際、候補者、西銘順治が掲げた持論。米軍基地撤去・即時無条件返還を掲げた屋良朝苗が勝利すると、沖繩は昔のようにイモを食い、はだしの生活に戻ると主張したが、屋良が当選、西銘は復帰後の78年から沖繩県知事を3期12年務めた。

■ソテツ
大正末期から昭和初期にかけての沖繩の経済的窮状を指して「ソテツ地獄」と言われる。主食（サツマイモ、米）を確保することもできずソテツ（猛毒を含み、調理法を誤ると中毒死する）を常食とせざるをえないほどの苦境下にあったことからそう呼ばれた。

名称で予定されていたが、開館直前に「学術人類館」とされた。「日本人類学の祖」と呼ばれる坪井正五郎の関わりを通じて、学術的な催しということで正当性を獲得したと言われる。

■耐え難きを耐え、忍び難きを忍び…
昭和天皇による終戦の詔勅（玉音放送）の一節。もともと的主語は天皇自身で、現代語訳では「私は、時の運命に導かれるまま、耐え難いことにも耐え、我慢ならないことも我慢して、未来のために平和を実現するため、道を開いていきたい」と述べたもの。

■方言札
標準語の使用を強制させるため、学校で方言を話した者に、罰として首から下げさせた木札。方言札をもらった子どもは、次に方言を使う子どもが現れるまで、見せしめのためにこれを首にかけさせられた。各地にあったが、特に沖繩で厳しく行われ、明治末から第二次大戦後にも用いられた。

■天皇陛下あ、バンジヤーイ
小話の一つ。
とある盛り場の飲み屋で二人の男が口論を始めた。

「言っておくけどおまえな、おまえ

■戦果アギヤー

戦果をあげる者の意。米軍占領期、アメリカ軍の倉庫に忍び込んで盗み出された米軍物資の食糧や備品が闇市などで売られていたが、人々はこれを「戦果」と呼んだ。占領者の米軍から盗み出し、貧しい人々の手に届けたことから英雄視される例もあったという。

■むんじゅる
「むんじゅる」は麦わらの意味。琉球民謡「むんじゅる」の歌詞の後半には、「芋のうまいのは唐芋だ米のおいしいのは赤地米」等とある。

■モーキヤー
「人の道を外れて大金を得る人」というニュアンスのある言葉。『人類館』では売春婦を指す。吉原、十貫瀬、栄町、ハーバービュー、波の上、桜坂、センター、照屋は、当時の風俗街。

■メイド時分
米軍統治下の沖繩では最盛期には1万4千人もの女性が米軍のメイドとして従事し、他の人たちに先んじて住・食生活においてアメリカ文化を体験した。「アメリカシーツ」もその一つ。家族同様の扱いを受ける者もあったが、勤務先家庭の男性から性被害に遭う者も少なくなかった。

くらいハチュオンの悪い男は沖繩中探してもいないよ」

「何いつているかひやあ、自分こそハチュオン悪い癖に」
「じゃ、おまえ、オーランホロー（横断歩道）と言ってみい」
「なにがオーランホローか、それを言うならオーランホローらう」
「笑って」バカタレ、オーランホローでもあるか、（大声で）オーランホロー」

「バカタレはおまえらう、話にならん、僕はもう帰る」と言い残し、鼻歌を歌いながら帰っていった。「夜のギンジャアは」、七色ネオン」

この話で笑えるのは相当なウチナンチュと言えるだろう。今では数少なくなってしまったが、ウチナンチュ世代は相当発音が悪かった。ザがジャになり、ダがラになっってしまうという具合である。それほどではないとしても「人類館」は、そんなウチナグチ世代にやや近い世代、つまり自分と等身大の観客を想定して書いた作品である。

（記念正真2004年）

■教育勅語
1890年に発布された、教育の基本方針を示す明治天皇の勅語。天照大神ら神々や歴代天皇

によってつくられた日本独自の「国体」に教育の根源があるとされ、親孝行から国法遵守まで、日本国民が実践すべき徳目を並べた上で、国の危機には一身を捧げて天皇の治世を助けなければならぬと説く。戦後、憲法や教育基本法と矛盾したため、48年の国会で失効確認の決議が行われた。

くさめくしやも日本風に

「人類館事件」当時、琉球新報の太田朝敷が本土との同化論を説く際に用いた表現。「極端に云へばくさめすることまで他府県の通りにする」ことを主張、奨励した。太田は1881年に初めての県費留学生として東京で学び、帰郷後に琉球新報の創刊に参加。のち県会議員、首里市長。

ベトナム帰りの兵隊

第二次大戦後の冷戦期、沖縄はアメリカの戦略上の要石（キーストーン）とされ、アジアにおける米軍の最大の根拠地となった。ベトナム戦争時の沖縄はベトナムへの米軍出撃基地となっており、B52が嘉手納基地に常駐して連日ベトナムへの爆撃を続けていた。

本部国民学校の校長先生

1945年4月、本部国民学校の照屋忠英校長は、米軍の名護上陸

内態勢強化方策が閣議決定され、14、25歳の未婚・無職・不在学の女子を居住地で女子挺身隊に組織することになった。44年3月から強制的になり、6月からは12歳にまで引き下げられ、軍需工場などに動員された。

郷土防衛隊

地域防衛のため現地在住の男性により組織された軍事集団。特に沖縄戦では防衛召集兵2万2千、2万5千人のうち、約1万3千人が戦死した。成人を中心とした防衛隊は、鉄血勤皇隊やひめゆり学徒隊などに比べて知名度が低い。が、動員数でも戦死者数でもこれらを上回っている。

生きて虜囚の辱めを受けず

1941年、東条英機陸軍大臣名で陸軍訓令第一号として示達された「戦陣訓」にある言葉「生きて虜囚の辱しめを受けず。死して罪人の汚名を残すこと勿れ」と続く。

島ぐるみ

戦後、アメリカの強制的な土地収用への反対運動が「島ぐるみ闘争」として発展した。1955年に伊江島の阿波根昌鴻らが島民とともに本島各地で実情を訴える反基地平和行進を展開し、この伊江島闘争などが56年からの島ぐるみ闘争へ発展、その後の沖縄復帰運動へとつながった。

の情報をも日本軍に伝えるに向かった。その直前まで青年たちに特攻精神を鼓吹し、少年たちを戦野にかり出していたため、じつとしていられなかったという。しかしその帰路にスパイ容疑をかけられ、日本軍に射殺された。

京太郎

京都からやってきた太郎の意、近世初期、美しい妻を領主に奪われ息子とともに京を追われ沖縄に流れ着いた京太郎の一行が琉球王から自由に喜捨を得て仏教を広めてよいという保証を得たという由来が語り継がれている。彼ら本土からの門付集団は、明治末期まで首里郊外の行脚村、安仁屋村に住み着き、正月や稲や麦の収穫の頃、近郊の村々を巡って春駒や仏回し（人形芝居）を披露し、念仏などを唱えて生計を立てた。

沖縄の復帰なくして日本の戦後は終わらない

元総理大臣・佐藤栄作（岸信介の弟）の言葉、1965年8月、日本の首相として戦後初めて沖縄を訪問し、演説「アメリカは沖縄を返すことで統治や基地維持の費用を抑えつつ、ベトナム戦争目的での基地の自由使用を確保。佐藤とニクソンは核密約を交わしていた。74年、佐藤にノーベル平和賞

「沖縄を返せ」

沖縄復帰運動の集会やデモでさかんに歌われた歌、社会運動だった「うたごえ運動」の流れの中で、1956年に全司法福岡高裁支部のうたごえサークルが作詞作曲したもの、三井三池炭鉱の労働者で音楽家の荒木栄が曲だけを改作した。歌詞は以下のとおり。

かたき土を破りて
民族のいかりにもゆる島
沖縄よ
我らと我らの祖先が
血と汗をもって

守りそだてた沖縄よ
我らは叫ぶ、沖縄よ
我らのものだ、沖縄は
沖縄を返せ
沖縄を返せ
沖縄を返せ

二十七度線

1952年にサンフランシスコ平和条約が発効し、53年に奄美諸島が返還されると、沖縄・辺戸岬と与論島のあいだの北緯二十七度線が新たな国境となった。63年から69年まで、条約発効日の4月28日に「海上集会」が開かれ、北緯二十七度線の海上で本土側代表団と沖縄側代表団が合流し、沖縄返還を訴えた。復帰から50年の2022年4月28日にはこの海上集会が再現された。

海行かば水漬く屍

海を行くなら、水に浸ったままの

ひめゆり部隊

沖縄戦当時、県立第一高等女学校、沖縄県師範学校女子部の生徒で組織された学徒看護隊。死線をさまよいながら傷病兵の看護にあたっていたが、320人のうち170人が戦死。釜淵市伊原に看護にあたった洞穴野戦病院壕があり、その入口に「ひめゆりの塔」が建立された。

鉄血勤皇隊

沖縄戦において動員された、日本軍史上初の少年兵部隊。防衛召集された旧制中学生ら1780人で編成され、戦闘行為に動員されて、約半数が戦死した。14、16歳の戦死者は567名だった。今では「健児の塔」に祀られている。

靖国神社

東京都千代田区九段坂上の神社。1869年に明治天皇の発議によって明治政府により創祀された「東京招魂社」が1879年に改称されたもの。1853年以降の幕末維新の政争、内戦で死亡した天皇側の「国事殉難者」や対外戦争の戦没者（軍人、民間人など）を祭神として合祀。死者に寄せる遺族の心情を国家に収斂する場となった。

女子挺身隊

戦時下の女性に対する強制的勤労動員組織、1943年9月、国

屍となるのもいとわぬ、の意。

「万葉集」にある大伴家持の長歌に見える大伴氏の家訓の一節。天皇のために、たとえ海・山で戦死することがあっても後退はしないという文脈で、第二次大戦中、戦意高揚のために作曲して歌われた。

唐旅

唐（中国）、すなわち太陽の沈む西へと向かうことから、転じて、みづから命を断つこと。

参考文献

演劇集団「創造 第37回 知念正真追悼公演」人権劇「パンフレット」、2014年
演劇集団「創造 創立55周年記念 第38回公演」「タシメー」の春 パンフレット、2014年
演劇「入船」上演を実現させた会・編入人類館封じられた歴「アットワックス、2005年
坂本幸彰、尚子「沖縄の闘争客 知念正真」人類館再訪、「演劇文庫」46巻、53頁、2008年
(https://www.geijakyo.jp/article/article/046_53/article.html)
小原真史「「人類館」の真実を説く」、『photographs gallery press no.14』2006年、p.55
佐草智久「米軍統治下沖縄のメイドたち―家事労働者と軍労働者の狭間で―」、『第91回日本社会学会発表要旨』2018年
(<https://ss.sociology.org/research/91/fbc/124.pdf>)
佐草智久「米軍統治下沖縄のメイド研究―職業の実態と社会的役割を中心に―」、『日本オラル・ヒストリー研究』第15号、2020年、177〜184頁
(https://www.geijakyo.jp/article/article/016_127_177)
平丸社「世界大百科事典」
小学館「日本大百科全書」

2020年にAKN PROJECTが発足してから、喜劇『人類館』公演を重ねる度に父の作品を好きでいてくださる皆様からいかに『人類館』を大切に大事に想っているか聞かせていただく機会が増えました。お話を伺っていくうちに、戯曲を取り巻く皆さんの想いを未来に繋いでいくことも、AKN PROJECTの大切な役割なのかもしれないと思うようになりました。

今回のクリエーションは、これら『人類館』の歴史も未来に繋ぐため、「戯曲を一言一句変えることなく、その上でできる私たちの伝え方」を共有することから始まりました。共同演出の新垣七奈さんは私よりもひとまわり以上年下ですし、歴史ある沖縄の作品を扱う事に不安な様子でしたが、彼女の丁寧な戯曲の読み方に感銘を受けていた私は何の迷いもなく「あなたの読み方で構わない、私たちの『人類館』を一緒に作りたい。」とお伝えしました。

あれから約一年半。数えきれないほどの「お茶云」という名のミーティングで対話と議論を重ね、それはそれは丁寧に戯曲を読み続けてきました。

同時に、作品に魅了された仲間が1人、また1人と加わってくださり、素晴らしいチームも出来ました。皆さんとのクリエーションはとてもワクワクさせていただけの内容ばかりで、回を増すごとに更に充実していき、あつという間に時間が過ぎていったような気がします。

自慢の仲間たちと、私たちを支えてくださった皆様の想いが作り上げた、私たちの喜劇『人類館』（2025年新演出版）が、父が仲間達と作ったかつての『人類館』同様、皆様に愛される作品になることを願っております。

演出 知念あかね

あのねー、この作品は重いよね。とてもじゃないけど扱えない。

今まで沖縄のことに無関心でいた私には関係のない作品だっと思ってた。案の定、戯曲を読んでみてもみんなが言う「怒り」ってものは湧いてこなかったし、やっぱり私には読みきれない戯曲なんだとずっと拗ねてた。今日も拗ねたままここにいます。

でもね、クリエーションを進めて行くなかで沸々と湧いてくる怒りがあって、それは『人類館』に背負わせすぎなのでは？ってこと。

『人類館』の自由を奪ってる人がいて、『人類館』を縛りつけてる事情がある。

ねえ、それってさ、語る気持ちよさだけが増幅してない？お願いだから、そうどうを止めないで。

肩の力を抜いて、少し身体を揺らして、ひとりでは辿り着けなかった場所へ。

（ちょっと余談なんだけど、最近気づいたことがあって、私、『人類館』を読みきることと私の中にある道徳的な何かを満たそうとしているのかもって。資格が欲しいんだと思う、沖縄を想っているって、向き合ってるって、考えているって、そういう資格。そういうスタンプ。）
（ほらね、危ないでしょ？）

演出 新垣七奈



演劇ユニット多々ら主宰。高校から演劇を始め、2016年にユニットを結成。これまでのユニット公演ですべての作品の演出を行う。演劇人コンクール2024にて奨励賞受賞。俳優として 外部作品に多数出演。近年の主な出演作には、2020 年コロナ禍でオンラインの開催が話題となった九州・沖縄版『未開の議場』オンライン（作：北川大輔）や、2021 年神里雄大が演出した『琉球怪談』（原作：小原猛、演出：神里雄大）、2023 年なはーとプロデュースによる出会いシリーズ1『声』（原作：ジャン・コクトー、演出：和田ながら）に出演している。



沖縄県那覇市出身。演奏家、音楽講師。幼少期より音楽を学び、演奏活動と指導等、長年クラシック音楽の普及に携わる。2013年に亡くなった父・知念正真の作品の継承のために2020年に「AKN プロジェクト」を発足。知念正真の作品を中心に、戯曲、音楽、文学等の芸術活動を通して「沖縄の若年層が楽しめる舞台作り」をテーマに活動。2021年にコロナ禍で「喜劇・人類館」(演出：上江洲朝男)の配信上演をプロデュースし、2022年には那覇文化芸術劇場なはーとにて沖縄「復帰」50 年特別企画として上演(演出：佐藤尚子、知念あかね)した。

2024年春、「植民者としての日本を考える演目」として『人類館』を招聘したいと、「あいち2025」の中村茜キュレーターから連絡があった。新演出版はそれから1年半をかけて制作された。上演される今年は「戦後」80年、大阪で再び万博が開催され、日本初の女性首相が生まれた。しかし歴史の中の加害性や今も続く差別と犠牲をかえりみる機会はあまりに少ない。

『人類館』の作者・知念正真は「ごっこ遊び」と「ドンデン返し」という言葉を好んだという。演劇は「ごっこ遊び」に過ぎないが、日本も世界も巨大で残酷な「ごっこ遊び」のようだ。だとしたら、異なる立場の人間が集まり、膨大な時間をかけて一つの現実＝戯曲を読み、新しいかたちにする演劇の場、この「小さな社会」から、「ドンデン返し」の可能性を探ることもできるのではないか。

劇場に集う観客とともに、歴史の抱える無数の矛盾と両義性を想起しながら、「喜劇の心」で現実をずらし、より公正なものへ変えていきたい。少しずつでも、繰り返し、繰り返す。

ドラマトウルク 林立騎

文字を声に出して言葉になったとき、身体のざわめきを感じるとき、視線が変わるとき、様々な時を重ねて、実験のように進む稽古がとても有意義です。

この作品が書かれた「とき」と、今この「とき」。何が変わって、何が変わってないんでしょうかね。

出演 井上あすか



南城市出身。学生時代、同級生が舞台に立つ姿を観て感動し、芝居を始める。過去出演作に、わらび座『笑いはつづく GO ON! GO ON!』(作・演出：大関弘政)、特撮ドラマ『琉神マブヤー』シリーズ、FOD ドラマ『ゲート・オン・ザ・ホライズン』などがある。なはーとでは、2023年『ぼくはみんながだいすき』(作・演出：新垣七奈)、2024年『ゼチュアンの善人』(上演台本・演出：新井章仁)、2024年『花売の縁 オン(ザ)ライン』(演出・振付：白神ももこ、作・演出：兼島拓也)に出演。そのほか舞台衣装制作や、連続ドラマW『フェンス』、短編映画『おかあの羽衣』の方言指導も行っている。



翻訳者、演劇研究者。現在、那覇文化芸術劇場なはーと企画制作グループ統括。訳書にイエリネク『光のない。』、レーマン『ポストドラマ演劇はいかに政治的か?』(ともに白水社)。イエリネク作品の翻訳で小田島雄志翻訳戯曲賞を受賞(2012年)。2005年より高山明の演劇ユニット Port B に、2014年より相馬千秋のNPO法人芸術公社に参加。東京藝術大学特任講師(2014-2017年)、沖縄アーツカウンシルプログラムオフィサー(2017-2019年)、ドイツの公立劇場ドラマトウルク(2019-2021年)を経て、2022年より現職。

ようこそ『人類館』へー。

多くの観客とともに永く愛されてきた戯曲から、静かで猛烈な「怒り」と沖縄への徹底的に「冷静な視点」、そして文字が温度を宿すほどの「郷土愛」を感じずにはいられませんでした。そしてこの役を届けることができるのだろうかという率直な想いがこの戯曲との初めての出会いでした。

あつという間に変わっていくシーンは、この島のダイジェストのようです。登場人物たちは強靱で、しなやかで、したたかで、たくましく、難解で、哲学的で、悲しくて、おかしくて、残酷で、ひょうきんで、そして傷を抱えています。稽古場の僕は、時々、自分が今どの人物であるか、混乱することもあります。役を通して、翻弄されながらも日々を紡いできた先人たちの想いを追体験させていただいているのかもしれないです。発見と反芻と挑戦を繰り返して、これからも日々模索していくのかなさそうです。それが戯曲から託されたバトンだと信じて。

出演 神田青

作品に向き合う時には、書いた方の事を思います。僕がまだ20代前半の頃、初めて正真さんにお会いしました。「幻のX調査隊」という作品で役を頂いて、怒鳴られました(笑)

「ただデカい声で叫べばいいってもんじゃないんだ!」とか。

すごい怖い人だと思ってましたが、お酒の席はお好きなようで…。普段は無口なのに、「雄作! 芝居つてのはな、生き様なんだよ!」なんて熱い事を言ったり。

僕が若手の役者達と公演をした時には観に来てくれて、「楽しかった!」なんて笑顔で言ってくれたり。僕が今回、陳列された男、を演じてるのを観てくれたら何と言ってくれるだろう。

「楽しかった!」と言ってくれるだろうか?

でも、一番聞きたいのは、「生き様」を体現出来ていますか?て事です。

これからも励みます。

出演 仲嶺雄作



1996年、演劇集団創造『仲村渠鉄男くんのパーマネントバケーション』に出演。2010年には古堅晋臣と演劇ユニット「ukulelebow! (ウクレレボウル)」を始動。2013年「わが街の小劇場」(那覇市)にて、月1回の公演等に参加。2018年、利賀演劇コンクールに、わが街の小劇場のメンバーとして参加。三島由紀夫の「弱法師 (よろぼし)」(演出: 福永武史)を上演。2022年には沖縄・復帰50年現代演劇集inなはーと「9人の迷える沖縄人 (うちなーんちゅ)」(作: 安和学治、国吉誠一郎、演出: 当山彰一)に出演。2022年AKNプロジェクト「喜劇人類館」(演出: 佐藤尚子、知念あかね)に陳列された男で出演。2024年リーディング試演会「ゼチュアンの善人」(上演台本・演出: 新井章仁)では水売りのワン役。沖縄県内の小劇場を中心に活動を続ける。



「わが街の小劇場」で育ち、ラオス、タイでの活動を経て、『ギ兄弟 3on3』(作・演出: バクファナム)にて、タイバンコク演劇祭 (BTF2019) で Best International Performance Award を受賞。主な出演作には、『ライカムで待っとく』(作: 兼島拓也、演出: 田中麻衣子)、『霞色のライラック』(作: 稜一朗、演出: 米倉リエナ)、『ジョンマイラブ』(作・演出: 横内健介)、『少年口伝 隊 1945』(作: 井上ひさし、演出: 栗山民也) など。映像では、『逃走』(監督: 足立正生)、『宝島』(監督: 大友啓史)、『唐人街探索 3』(監督: 陳思誠)、TBS『クジャクのダンス 誰が見た』や『おきなわテレビはじまりものがたり』、『阿麻和利 the last hero』などに出演し、幅広く活動している。

このクリエイションが始まってから、何度か沖縄でリサーチをさせてもらいました。作品に関わりそうな場所を案内していただいたり、参考になる本を紹介していただいたり、逆に自分の舞台美術プランへのさまざまな意見や解釈を聞いたりする中で、たりつけない感覚が強まった時に、人類館のことや沖縄のことから目をそらして、台湾の漫画や映画、本を読みあさっていたら（ふてくされていたら）、なんとなく舞台美術のコンセプトを地形にしたらいいな気がしてきました。

それまでのクリエイションチームとの対話やリサーチなどが発酵した感じだと思います。

地形はそこに関わるすべてのものに何かしらの影響を与えます。

舞台美術 佐々木文美

テキストを読んで、リハールで通し稽古をみせていただくうちに、あ、ほんとに「人類館」て意味の作品なんだと思いました。出演者が発語すればするほど人間の弱さとか滑稽さずるさとか、かわいさ明るさも、どんどん鮮やかに披露されて、これは自分や友だちだった可能性もあると思うずにはいられない、ていうか現代を生きる自分たちに起きている問題や目にしてるけど気がついていない問題に無関心ではいられない、では自分たちはどうやって生きましようか、と考えずにはいられない、そういう作品なのですねと勝手に受け止めました。

あまりにでかく至近距離で問うてきますねと思うこの作品、観てる側の能動も受動も問うてくるこの作品の、このクリエイションチームに参加させていただけたことに感謝します。

衣裳 藤谷香子



衣裳家。快快(FAIFAI)所属。多摩美術大学在学中より衣裳家として活動を始め、国内外の演劇、ダンス、オペラ、コンサート、現代美術の作品や芸術祭でのパフォーマンス作品に参加し多岐にわたる分野で活動を行う。その他では宣伝衣裳、美術館でのWS、講師として授業も行う。近年では岡田利規の演劇作品、金氏徹平の現代美術作品、角銅真実、中村佳穂など音楽家へのスタイリング、近藤良平 × 永積崇 (ハナレグミ)「Great Journey」シリーズに参加。



1983年生まれ、鹿児島県出身。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科卒。セノグラファーで快快(FAIFAI)メンバー。演劇、ダンス、音楽、展示などに舞台美術、セノグラフィーとして参加したり、企画も稀にする。ホームパーティーをするのが好き。

本公演では音響プランを担当させていただきました。戦後80年という節目となる本年に沖縄で継承されてきたこの作品を上演する。

このことは当初この作品作りに関わるお話を頂いたとき、愛知県で生まれ育ち今まで沖縄にゆかりも無く、戦争を体験した世代でも無い私にはとても重責ではないかと悩みました。

しかし作品を読み進めるうちに、この大きな歴史に対し私が為すべきことは重責から身を引くのではなく、知らないことを素直に受け入れ、人々の声や言葉に耳を傾けることであると強く感じました。

この作品は、どう向き合うかによって見え方は様々かもしれません。

音響として関わる上で、これまで大切にしてきたことを継承するとともに、観ている方が声に耳を傾けながら様々な背景を想像できる空間とは何か、という新しいチャレンジも意識しながらプランを行いました。

ご来場いただいた皆様にも作品の持つ『声』が届くことを願っています。

音響プラン 山口剛

この『人類館』に携わったのは20代の頃だったような気がします。

何もかもわからなくて、ただただ先輩が明かりを作っているのを眺めていましたが、舞台袖で、その時代、時代の役者さんの苦悩を目の当たりにしてきました。そうだ、この作品には『苦悩』が付きまとうかもしれません。

作品の難解さはもちろん、セリフの少しのニュアンスで作品がこぼれるように落ちていってしまう：

そんな繊細な作品のような気がします。

だからこそ3人の役者さんは稽古を重ね、苦悩し、挑戦する。最後には、やって良かったって思えるはず。そんな素敵な作品に今回も参加できることは嬉しいです。

新演出の喜劇『人類館』を、はたして明かりでどう表現しているか、このテキストを提出している現時点ではまったくわかりません。

今はただ、凄い舞台美術プランをいただいたので『あばれはっちゃく』のようなポーズで何か閃くかやっています。ムチかしいです、本当。

照明 棚原栄作



舞台照明家。沖縄県出身。ホール管理会社、舞台照明会社を経て独立し、幅広い舞台芸術に関わる。2021年『株式会社エムエルスタジオ』を立ち上げ、現在に至る。主な仕事は演劇、ミュージカル、バレエ、音楽コンサート等。沖縄ラフ & ピース専門学校 照明講師。

第41回(2021年度)日本照明家協会賞新人賞、第44回(2024年度)日本照明家協会賞 優秀賞を受賞。



愛知県出身。大学在学中からフリーランスとして様々なイベントやミュージシャン等のオペレータを担当し、2009年に音響技術を専門とする合同会社ネクストステージを設立。

コンサートやイベントの音響を主軸とし、演劇やインスタレーション、コンテンポラリーダンス等の音響デザインも手がける。

近年の作品制作ではマルチチャンネルスピーカーや立体音響技術などを活用しながら、常識にとられない音響表現をテーマに音響デザインを行っている。

沖縄の文学史に残る作品の再上演プロジェクトに携わることができて光栄でした。上演の際に役者さんたちがどのように演じるのか、拝見するのが楽しみです。

イラスト 大白小蟹

マンガ家、イラストレーター。1994年沖縄県生まれ。2021年「うみべのストープ」(トーチweb)でデビュー。著書に、マンガ「うみべのストープ 大白小蟹短編集」、「太郎とTARO」。2023年よりWebコミックメディア「路草」にて「みどりちゃん、あのね」を連載中。



フライヤーを配りながら「人類館事件を知ってますか?」とたずねてみて、ほぼ「知らない…」と返ってくることにちよつと戸惑っています。そこで思いついたのは「みんなに忘れ去ってほしくない出来事ってありますか?」を聞くこと。

喜劇『人類館』は「記録」になりつつあることを「記憶」にする、演劇の力を感じられる舞台。

一方、誰もが自分のなかにもっている(かもしれない)排他性と向き合う時間にもなるでしょう。

大きな災いを経験し、死んでいった人の魂をなぐさめたい想いが強い沖縄に投げ込まれる「分断」を越えて、対話の回路がひらかれますように。

宣伝美術 アイデアにんべん

今回の英訳で、久しぶりに知念正真氏の『人類館』を読み返す機会が与えられて改めて思うのは、人は変化し続ける存在だということである。各々の役者の役は、自己完結した一人の一つの思想に留まらない。調教師は調教師であり、帝国軍人であり、同郷沖縄人であり、戦場動員した教師であり、また反戦復帰運動を先導した戦後教員である。これを無節操と考えるべきではない。一人の存在に複数の顔たちが存在する。それら他者たちの異なる経験は、決して他人事ではなく、その経験は自分自身でもあり、また明日の自分かもしれない。差別から逃れたいが故に、調教師になり、軍人になり、反戦家になるのであり、『人類館』は苦世からの脱出という夢を複数の他者たちとともに描き出す。

英訳 金城正樹

学生の頃から、ふらっと演劇の世界に入り、二十代で歴史ある作品に関わりました。先輩方は様々な話をしてくださって、そこから、沖縄演劇界の系譜を知ることとなります。その先輩方が語られていた作品『人類館』に、今、関わるということ。大変感慨深いと思います。2022年版の喜劇『人類館』にも制作助手として関わらせていただきましたが、戯曲を読むたびに、心を動かされるシーンが異なります。そして魅了され、いつの間にか私自身も物語の渦中にいるのです。人間の愚かさ、脆さを問われているようでもあります。今もそう。根本は変わらない。だけど、諦めたわけじゃない。そんな強い思いを受け取りながら、私は制作としてこの作品に挑んでいます。

制作 喜舎場梓



劇団にて16年間、舞台制作および芸能マネージャーとして従事。演劇ワークショップの企画・運営を行うなど、コーディネーターとしても活動中。2023年より沖縄アーツカウンシルのプログラムオフィサーを務める。

ニューヨーク大学 東アジア研究学部教員。論文に「暴力と歓喜——フランツ・ファノンの叙述と目取真俊「虹の鳥」から」(富山一郎/森宣雄編「現代沖縄の歴史経験—希望、あるいは未決性について」所収)など。

「聴く」「考える」そして「伝える」のが仕事。パンフレットやパッケージの企画制作、編集、執筆などを承る事務所をふたりで運営しています。



作	知念正真
演出	知念あかね、新垣七奈
出演	井上あすか、神田青、仲嶺雄作
ドラマトウルク	林立騎 [那覇文化芸術劇場なはーと]
舞台美術	佐々木文美
衣裳	藤谷香子
音響プラン	山口 剛 [(同)ネクストステージ]
照明	棚原栄作 [(株)エムエルスタジオ]
音響オペレーター	屋比久夏芽 [(株)エスエルアイ]
音響アシスタント	嘉陽桃瀬
演奏	比嘉啓和 (歌三線)、村上佳子 (歌三線)、砂川政秀 (太鼓)、 長濱良起 (ギター、ハーモニカ)、上地広季 (トランペット)、 古堅晋臣 (ウクレレ)、新垣七奈 (三板)、知念あかね (バイオリン) 花城清長、上江洲朝男
沖縄ことば指導	金城正樹
英訳	比嘉啓和 (沖縄公演)
英語字幕オペレーター	南部充央
バリアフリー字幕デザイン	渡久地準 (沖縄公演)
バリアフリー字幕操作	山本舞子
演出助手	砂川政秀
演出部	(同)みやぎ大道具
大道具製作	玉城流いずみ会
小道具協力	津嘉山弘 [月光道 (同)]
舞台監督	大白小蟹
イラスト	アイデアにんべん
宣伝美術	植松侑子
ハラスメント防止研修	土屋わかこ [那覇文化芸術劇場なはーと]、喜舎場梓、村上佳子 [那覇文化芸術劇場なはーと]
制作	

国際芸術祭「あいち2025」パフォーミングアーツ企画体制	
キュレーター	中村茜
テクニカル・ディレクター	守山真利恵
コーディネーター	神田圭美、野崎美樹、林真智子、林芽生、上條桂子、加藤奈紬、 篠田菜、田澤瑞季、黄木多美子、小仲やすえ、斉藤友理、嶋山貴文



撮影 仲間勇太

演出助手 山本舞子

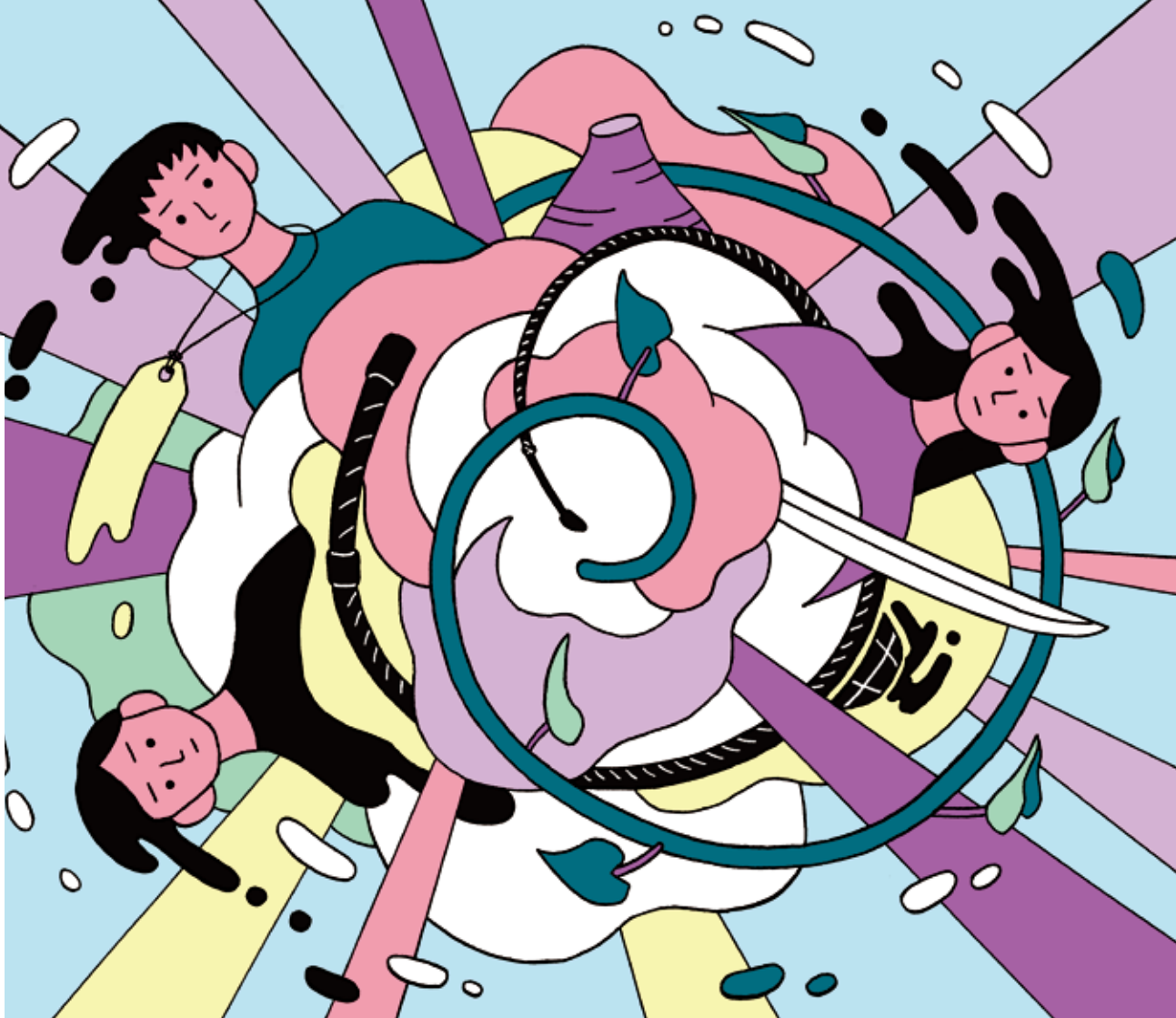
私が、初めてこの本を読んだ時、いちばん衝撃的だったことは、読めない、と言うことでした。沖縄で生まれ育ったにも関わらず、沖縄の言葉で語られる部分を読むことができず、その現実をどう受け止めれば良いか戸惑いました。そして、作品ができて50年経とうとしている今、私と作品の間にどうしてもできてしまったギャップも感じています。メタ的に読むと理解できそうな気がするけれど、近寄って読むと、やっぱりわからなくなってしまう。そんな気持ちを抱えながら、毎日稽古場に出向いています。大切にしてきた方が多い作品だからこそ、新演出という形でまた新たな世代にこの作品を届けられるよう、できるだけ嘘をつかず、最後まで作品に向き合っていけたらと思います。

一度観ると何かを語りたくなるようなこの歴史ある作品『喜劇『人類館』に携わることを光栄に思います。この文章を書くのにかなり緊張してしまっているのですが、格好はつきませんが正直に書き起こしていこうと思います。



沖縄県出身。幼少期から映像作品に携わり、大学在学中から演劇活動を開始。2024 年に演劇ユニット多々らのクリエイションパートナーとなる。同年、アートマネージャー・メンターシッププログラム『バッテリー』に第3期メンティーとして参加した。

彼らも私たちと同じ人間なのに……



喜劇人類大倉

きげき
じん
い
かん
(2025年新演出版)

沖縄公演

那覇文化芸術劇場 なはーと 小劇場

2025 11.1(土) 14:00~、19:00~
11.2(日) 14:00~
11.3(月・祝) 14:00~

戦後80年特別企画

※各回公演後、トークを予定。

※英語字幕あり(座席指定)

※全公演、バリアフリー字幕ガイド(日本語)あり

※11月1日(土)・2日(日)各14時の回のみ託児サービス(事前予約・有料)あり

主催：那覇市 共同製作：国際芸術祭「あいち」組織委員会

企画制作：那覇文化芸術劇場なはーと、AKNプロジェクト、国際芸術祭「あいち」組織委員会

愛知公演

愛知県芸術劇場 小ホール

2025 11.22(土) 18:30~
11.23(日) 13:00~、18:30~
11.24(月・振休) 14:00~

国際芸術祭「あいち2025」パフォーミングアーツ 参加作品

※11月22日(土)・23日(日)18:30の公演後、トークを予定。

※英語字幕あり(座席指定)

※全公演、バリアフリー字幕ガイド(日本語)あり

※全公演、託児サービスあり

共同製作：那覇文化芸術劇場なはーと、国際芸術祭「あいち」組織委員会

企画制作：那覇文化芸術劇場なはーと、AKNプロジェクト、国際芸術祭「あいち」組織委員会

共催：愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団)

AKNプロジェクト (2025年新演出版)